

復活節第3主日（A年主日の福音を中心とする「霊的な読書」）

（一）聖書朗読：ルカ福音 24：13-35

エマオという村に向かって歩いている二人の弟子が、望みをかけてイスラエルを解放するイエスが十字架につけることに暗い顔をした。しかし、復活したイエスはご自身が近づいて来た。彼らと出会っても、イエスであることに気付かなかった。聖書全体についての説明を聞き入れて、イエスを引き留めようとして言った。イエスがパンをさいて、二人の目が開かれ、イエスであることに気付いた。彼らは心の内で燃えて、エルサレムに引き返して、使徒たちに、「主は本当に復活して、シモンに現れになった」と話していた。

（二）カテキズムの響き（カトリック教会のカテキズムの番号 #642-644、1329、1346-1347、1373-1374；YOUCAT #105 - 106、212 - 213）

使徒たち、特にペトロは、復活の朝に始まった復活されたイエスと出会うことになりました。ペトロを初めとする使徒たちに限られていたのではなく、イエスが同時に五百人以上に現れたとパウロが明確に述べています。福音によれば、イエスが亡くなられた後の弟子たちは熱狂的な集団とはほど遠いもので、暗い顔をして、恐れていました。ですから、弟子たちは墓から戻った婦人たちのことばを信じず、この話がたわ言のように思われた。そのために、復活したイエスは、触らせたり食事をともにしたりして、弟子たちと直接に交わられました。特に、弟子たちには体を見せ、その体が苦しみを受け、十字架に付けられた体と同じであることを納得させようとしておられます。受難の傷跡をまだ帯びているからです。しかし、この体は、同時に栄光の体の新しい特性を備えています。もはや、時空のうちには置かれず、望む所と時に思いのままに存在することができます。今日、死と復活のキリストは、様々なしかたで教会に現存されます。ご自分の言葉のうちに、ご自分の教会の祈りの中に、ご自分が制定された諸秘跡のうちに、ミサのいけにえ並びに司式者のうちに現存されます。特に、パンとぶどう酒がキリストの体と血に変わることによって、キリストはこの秘跡に現存するものとなります。だから、感謝の祭儀であるミサの中に、神の言葉の食卓であると同時にキリストの体の食卓でもあります。そこには、復活されたキリストが二人の弟子たちと取られた過ぎ越しの食事の展開そのものが見られます。道を歩きながらイエスは彼らに聖書を説明し、それから、ともに食事の席に着いて、パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになったのです。実は、パンを裂くことと言われるのは、ユダヤ人の会食に固有なこの儀式を、イエスが、食卓の主人としてパンを祝福して配られた時、特に最後の晩餐の時に用いられたからです。復活後の弟子たちはまさにこの動作を見て、キリストを認識することになります。初代教会の信者たちは、自分たちのエウカリスチアの集いをこの表現を用いて呼ぶようになるのです。そうすることによって、裂かれた唯一つのパンであるキリストを食べる人々は皆、キリストと交わりに入り、キリストと結ばれた唯一つの体を形作るようになったことを表現するのです。

（三）カテキズムの学び（『コンペンディウム』カトリック・カテキズム要約の番号）

#275-277、280-282、287 感謝の祭儀の呼び方、挙行、意味

- この秘跡の呼称：エウカリスチア（感謝）、ミサ、主の晩餐、パンを裂くこと、主の受難と死と復活の記念、聖なるいけにえ、神聖なる典礼、聖なる神秘、聖なる交わり。
- 感謝の祭儀は叙階された奉仕者によって礼拝行為である：ことばの典礼、感謝の典礼（祈り）
- ミサの意味は、救い主のいけにえの記念と過ぎ越しの会食に与り、死と復活のキリストの現存（御言葉とご聖体）の中で、主キリストと出会い、永遠の命をもらうことである。

最後の祈り：アレルヤの祈り（『カトリック・カテキズム要約』付録A）